

NEWS LETTER

No.90

2016 Dec.

日本がん予防学会 Japanese Association for Cancer Prevention(JACP)

CONTENTS

- 01 第75回日本癌学会学術総会から：ゲノム医学、がん分子標的療法、そして免疫チェックポイント療法
(宮園 浩平)
- 02 学者の風貌～考え深げな黙想と真摯な魂と輝く目～
(樋野 興夫)
- 02 がん予防法開発への長い道のり
(酒井 敏行)
- 03 がんの血行性転移における血管内皮細胞の役割
(間石 奈湖)
- 04 天然物から発癌予防の機能性成分を見つける
(有元佐賀恵)
- 04 遺伝子多型と胃がん罹患リスク
(日高 章寿)
- 06 Apocynin の化学予防物質としての可能性
(鈴木 周五)
- 06 私の健康法
(渡辺 民朗)
- 07 日本がん予防学会とがん予防のさらなる発展を祈念して—理事長退任の挨拶に代えて—
(富永 祐民)
- 07 第24回日本がん予防学会ご案内
- 08 日本がん予防学会 臨時新理事会 会議事録のまとめ
- 08 編集後記
(細川真澄男)

第75回日本癌学会学術総会から： ゲノム医学、がん分子標的療法、 そして免疫チェックポイント療法

Report of the 75th Annual Meeting of the
Japanese Cancer Association - Genome
medicine, molecular target therapy of
cancer, and immune checkpoint therapy



宮園 浩平

東京大学大学院医学系研究科

Kohei Miyazono (Miyazono@m.u-tokyo.ac.jp)

平成28年10月6日(木)～8日(土)まで、横浜で第75回日本癌学会学術総会を開催し、大会長を務めさせていただいた。今年のテーマは「がんの基礎、TR、臨床研究：ブレイクスルーを目指して」とし、今後のがん研究の更なる発展を目指して会員が集う場とさせていただいた。今回の癌学会でとくに話題となったのは、目覚ましい発展をとげているゲノム医学、がんの分子標的治療法、そして免疫チェックポイント療法の3つであったと言えよう。そのほかにも多くの注目すべき発表があったが、上記の3つはここ数年のがん研究やがんの臨床を根底から大きく変革させているといっても過言ではないと思う。

今回の癌学会では豊島久真男先生はじめ4名の先生に講演をお願いし、シンポジウム「我が国のがん研究：その

歴史と未来」を企画した。本シンポジウムは皆様から高い評価をいただいたと自負している。我が国は、基礎研究では優れた成果をあげているが、橋渡し研究にはこれまで十分な研究費の配分がなく、成果も乏しかったとしばしば指摘される。しかし本シンポジウムで感じたことは、我が国の近年のがん研究は橋渡し研究や臨床研究にも優れた成果が数多く見られるようになっており、あらためて基礎から臨床までのシームレスな研究を行える基盤整備が必要であるということであった。

近年のがん研究で特筆すべきことは、ゲノム医学の目覚ましい発展であろう。がんの教科書を見ても最近ではゲノムに関する記載が大きな部分を占めるようになり、がんを理解するうえでゲノム情報は欠かせないものとなって来た。今回の癌学会の市民公開講座

でも分かりやすく紹介されたが、ゲノム情報によって肺がんの治療薬の選択方法が大きく変わり、個々の患者さんに適切な薬剤が使われるようになった。

た。ある種のがんにかかりやすいことが分かればそれを予防するような方法も今後次々に紹介されて行くことであろう。ゲノム情報を基盤にしたがん予

防法は今後も益々発展して行くと予想され、期待して注目して行きたい。

学者の風貌～考え深げな黙想と真摯な魂と輝く目～

The persona of a true scholar ~ deeply meditative demeanor and eyes that shined with earnestness ~

樋野 興夫

順天堂大学医学部病理・腫瘍学
Okio Hino (ohino@juntendo.ac.jp)



日本がん予防学会ニュースレター依頼が、Alfred G. Knudson, Jr., MD, PhD (8/9/1922-7/10/2016) の追悼のタイピングとなった。思えば、昨年 (2015年) 9月、Philadelphia の Knudson 博士宅を訪問したのが、今生の別れとなった。丁度、その時、発行された、『明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい』(幻冬舎) も捧げた。思えば、筆者が、Fox Chase Cancer Center (フィラデルフィア) に留学出来たのは、菅野晴夫先生、北川知行先生、杉村隆先生、今は亡き、森亘先生、西塚泰章先生、UICC の支援のお陰で

ある。Knudson 博士との邂逅は、筆者にとっては、人生の大切な、宝物となった。人生は、人知を超えた出会いである。まさに人生の“two-hit”である。

Knudson 博士から学んだ5ヶ条

- 1) 複雑な問題を、焦点を絞り単純化する
- 2) 自らの強みを基盤とする
- 3) なくてはならないものは多くない
- 4) なくてもいいものに縛られるな
- 5) Red herring (相手をその気にさせて間違った方向に行かせる) に気をつけよ

人生において、良き出会いが、いかに大切であるかである。「人生邂逅の3大法則—良い先生、良い友、良い読書—」は、厳粛な絶対性大原理である。「ふれぬ大局観の獲得」は「不思議な人生の邂逅」の連続によって与えられることの体験的学びであった。まさに「進歩と保守の一致する所、旧と新との融合する所、そこに真醇なるものが生起する」(内村鑑三) の言葉が鮮明に甦る。

1860年代遣米使節団が、ニューヨークのブロードウェイを行進した。彼らの行進を見物した詩人ホイットマンは、印象を「考え深げな黙想と真摯な魂と輝く目」と表現している。この風貌こそ、現代に求められる「学者の風貌」ではなかろうか。まさに、Knudson 博士は、『小さなことに、大きな愛をこめる』心優しい、愛情豊かな「学者の風貌」であった。

がん予防法開発への長い道のり A long and winding road to cancer prevention

酒井 敏行

京都府立医科大学大学院医学研究科分子標的癌予防医学
Toshiyuki Sakai (tsakai@koto.kpu-m.ac.jp)



いろいろな所でお話ししているように、私が和歌山県の高校生だった時に、弟が骨肉腫で亡くなったために、がん研究者を目指した経緯がある。大学卒業の頃、種々考えた結果、最も予防が重要であると感じて、京都府立医科大学公衆衛生学教室に入った。そこで、国立がんセンターの杉村隆先生の所で

発がん予防研究をされ帰ってこられたばかりの、生化学教室の西野輔翼先生の門をたたいた。丁度その頃、西野先生は、プロスタグランジンががん細胞の分化誘導に関わることにも関心を持っておられ、当時殆ど活性が明らかにされていなかったプロスタグランジン D2 の研究をするようにアドバ

イスされた。それで、プロスタグランジン D2 がヒト神経芽細胞腫細胞に分化誘導を起こすか調べたところ、驚いたことに、そのヒト神経芽細胞腫細胞を殺してしまった。そのため、その後しばらくは、がん予防よりも、抗腫瘍性プロスタグランジンによる、がん治療研究に没頭することになった。

その後、ケルセチンなどのフラボノイドが、発がん機構の根幹である細胞周期を G1 期などで停止させることにより、発がん予防に効果がある可能性を思いつき、多くの院生を指導しながら、予防研究に入っていた。このケルセチンが G1 期で停止させることを明らかにした論文は、フラボノイドが細胞周期に影響を与えることを示した最初の論文だと思っている。その後、

最初に発見されたがん抑制遺伝子である網膜芽細胞腫遺伝子 RB に関心を持ち、RB をクローニングしたハーバード医科大学眼科の Dryja 博士の所に留学し、RB の研究に没頭することとなった。帰国後、殆どの発がんは RB の失活が関与することを知るに至り、RB を中心として、予防、診断、治療の全てにわたり企業と研究することとなった。

この産学連携研究の結果、診断と治療に関しては、臨床に使用されるもの

を出すことができた。特に、first-in-class の MEK 阻害剤 trametinib (商品名 Mekinist) を見いだすことができ、進行性 BRAF 変異メラノーマの第一選択薬として世界中で使用されることになったことは望外の喜びであった。ただし、本職であり、最も時間をかけて研究してきた「がん予防」に関してはまだ道半ばである。山あり谷ありで、そうそう簡単にはいかない現実があったことは認めざるをえない。しか

しながら、優秀な共同研究者や企業の方々のお力添えにより、かなり実用化に向けて進んできたことだけは確かである。

私が研究できる時間がどれくらい残されているのかはわからないが、何とか実際に多くの人々のがん予防に貢献できる「究極のがん予防ジュース」などの実現に向け、これからも、多くの共同研究者の方々と一緒に歩んでいきたいと願っている今日この頃である。

がんの血行性転移における血管内皮細胞の役割

The role of tumor endothelial cells in hematogenous metastasis

問石 奈湖

北海道大学遺伝子病制御研究所
フロンティア研究ユニット血管生物学研究室 助教
Nako Maishi (mnako@igm.hokudai.ac.jp)



がんの転移はがんによる死亡の大きな原因であり、転移の機序の解明ならびにその制御は重要な課題です。血行性転移では、がん細胞は血管内皮細胞間を通り抜けて血管内へ侵入し、血管内を移動して遠隔臓器へと生着し、浸潤・増殖して転移巣が形成されます。私たちはその転移のステップに関わるがん組織内の血管内皮細胞（腫瘍血管内皮細胞）に着目した研究を行っています。現在、腫瘍血管内皮細胞が染色体不安定性を示すこと、増殖因子やケモカインの発現が高く、増殖能・遊走能が亢進していることなど様々な異常性があることが知られています。また私たちは最近、高転移性がん低転移性がんではその中の腫瘍血管内皮細胞の性質が異なり、高転移性がんの腫瘍血管内皮細胞がより異常性を示すこと

を見出しました。これはがん細胞を含む周囲の微小環境の影響を受けて、腫瘍血管内皮細胞が多様性を示すことを示唆しています。「高転移性がん」と言えば、通常はがん細胞そのものの性質を表しますが、私たちはそのがん微小環境の影響を受けて異常性を獲得した腫瘍血管内皮細胞も、転移に重要な役割を担っているのではないかと考えました。

分離・培養した初代培養の腫瘍血管内皮細胞を用いた *in vitro* および *in vivo* 実験により、高転移性腫瘍由来血管内皮細胞ががんの転移を促進すること、その機序に腫瘍血管内皮細胞が分泌する Biglycan という分泌タンパクが関与することを見出しました。

これまでがん細胞の血管内侵入といえば、がん細胞の浸潤能や腫瘍血管の

構造的異常（血管内皮細胞同士の結合が弱く、ペリサイトの被覆が不完全で未熟）に着目されていました。しかし、腫瘍血管はがんの転移の初期通路であるだけでなく、がん細胞を転移へと誘うような働きをしているという全く新しい転移のメカニズムが示唆されました。今後、腫瘍血管内皮細胞の特性をさらに解明し、腫瘍血管を標的としたがん転移治療法や予防法につながるよう研究を進展させていきたいと思っています。

(参考文献)

Hida K. *et al.* Tumor-associated endothelial cells with cytogenetic abnormalities. *Cancer Res* 64(22): 8249–8255, 2004.

Ohga N. *et al.* Heterogeneity of Tumor Endothelial Cells: Comparison between Tumor Endothelial Cells Isolated from Highly Metastatic and Low Metastatic Tumors. *Am J Pathol* 180(3): 1294–1307, 2012.

Maishi N. *et al.* Tumour endothelial cells in high metastatic tumours promote metastasis via epigenetic dysregulation of biglycan. *Scientific Reports* doi:10.1038/srep28039, 2016.

ご寄附の御礼

日本がん予防学会では、平成 28 年度、以下の企業からご寄附を頂戴致しました。ここに厚く御礼申し上げます。

(株)アミノアップ化学

(株)玄米酵素

大鵬薬品工業(株)

(株)ヤクルト本社中央研究所

新規の寄附も受け付けております。寄附等のお問い合わせにつきましては、学会事務局までご連絡下さい。

天然物から発癌予防の機能性成分を見つける

Search for anti-carcinogenic compounds from natural products

有元 佐賀恵

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科薬学系
Sakae Arimoto-Kobayashi (arimoto@okayama-u.ac.jp)



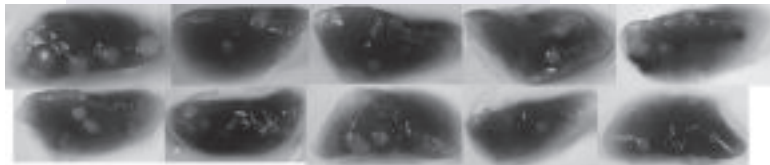
日本人の半数が癌に罹患する時代に、可能ならば二次・三次予防よりも一次予防、癌にかかりたくないというのは切実な希望となっている。これまで私は、癌予防性の天然物の探索研究を行っており、抗変異原性を一次スクリーニングとし、動物実験による抗発癌性を二次スクリーニングに用いている。研究材料として World Cancer Research Fund のまとめで decreased risk とされたフルーツを中心に、国内で言い伝え的に“体に良い”と言われ

ているものを優先にスクリーニングを行っている。その結果、これまでに抗発癌性を見出した果実がヤマブドウ (*V. coignetiae*) とサルナシ (*A. arguta*) である。ともに果汁の経口投与(自由摂取)で、タバコ特異的ニトロサミン (NNK) 誘発マウス肺癌発症を抑制し、ジメチルヒドラジン誘発ラット大腸癌前癌病変発症を抑制した。ヤマブドウおよびサルナシ果汁からの有効成分分離研究を行っており、マウスの NNK 誘発肺腫瘍の数を有意に減少さ

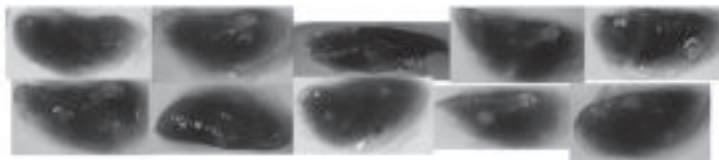
せる成分化合物をヤマブドウから見出している(写真)。作用機構として、この化合物の抗炎症性ととも、アルキル化剤による DNA メチル化に対する阻害効果を見出している。サルナシについても有効成分の同定研究を行っており、ポリフェノール化合物らしいところまでは突き止めている。最終的な構造同定に先立ち、想定される化合物についての抗発癌性研究なども開始している。ヤマブドウとサルナシそれぞれの近縁植物についても活性比較研究を行っており、ほかの天然物についてもスクリーニング研究を継続している。

動物実験での抗発癌性物質研究の成果をヒトへ還元することの難しさは痛感している。しかしながら、「効く薬もない」というのは望ましい状態ではないと思うので、癌予防機能性物質の候補を見つける研究は無駄にはならないと信じて頑張ろうと思う。

肺発癌物質
NNKのみ
(陽性対照)



肺発癌物質
(NNK) +
ヤマブドウ
成分化合物
(経口)



遺伝子多型と胃がん罹患リスク Genetic polymorphisms and gastric cancer risk

日高 章寿

国立がん研究センター 社会と健康研究センター 疫学研究部
Akihisa Hidaka (ahidaka@ncc.go.jp)



アジアで最も一般的ながん種の一つである胃がんの主な原因はヘリコバクター・ピロリ感染であることが知られているが、感染者で胃がんになる人は一部にすぎない。これまでの疫学研究

では喫煙により胃がん罹患リスクが上昇すると報告されているが、飲酒と胃がん罹患リスクとの関連は明らかではありません。しかしながら、国際がん研究機関によると喫煙だけではなくア

ルコール、アセトアルデヒド(ただしアルコール飲料由来のもの)とともに人に対して発がん作用があると報告されている。異物代謝酵素の遺伝子(シトクロム P450 1A1: *CYP1A1*、グルタチオン-S-転移酵素: *GSTM1*, *GSTT1*)、アルコール代謝酵素の遺伝子(アルコール脱水素酵素: *ADH1B*, *ADH1C*、アセトアルデヒド脱水素酵素: *ALDH2*)に見られる機能的遺伝子多型は酵素活性に影響するため、多目的コホート研究(JPHC Study)をベースに構築したコホート内症例・対照研究(胃がん 457 例、対照 457 例)にてそれぞれの機能的な遺伝子多型に基づいて

喫煙、飲酒量と胃がん罹患との関連を検討した^{1,2)}。

検討の結果、飲酒量、アルコール代謝関連遺伝子多型単独による胃がん罹患リスク上昇は認めないが、アルコール代謝関連遺伝子多型の *ADH1C* (rs698)、*ALDH2* (rs671) と飲酒量を両方同時に考慮することで胃がん罹患リスクが上昇しアルコール代謝関連遺伝子多型と飲酒量との交互作用を認めた (図1)。一方、異物代謝関連遺伝子多型である *CYP1A1* (rs4646422) により胃がん罹患リスク上昇を認めた。しかしながら、喫煙と異物代謝関連遺伝子多型を両方同時に考慮した胃がん

罹患リスクについても検討したが交互作用は認めなかった (図2)。今回の研究では飲酒量と胃がん罹患リスクとの関連を検討するにあたり、アルコール代謝酵素に関与する遺伝子多型も組み合わせる必要があることを示唆する結果であった。

今後、さらに前向きに収集した生活習慣情報とその生活習慣に関与する遺伝子多型を組み合わせたがん罹患リスクを検討することが重要である。

【参考文献】

1. Hidaka A et al: Genetic polymorphisms of *ADH1B*, *ADH1C*, and

ALDH2, alcohol consumption, and the risk of gastric cancer: The Japan Public Health Center-based prospective study. *Carcinogenesis*. 2015; 36(2): 223-31.

2. Hidaka A et al: *CYP1A1*, *GSTM1*, and *GSTT1* genetic polymorphisms and gastric cancer risk among Japanese: A nested case-control study within a large-scale population-based prospective study. *Int J Cancer*. 2016; 139(4): 759-68.

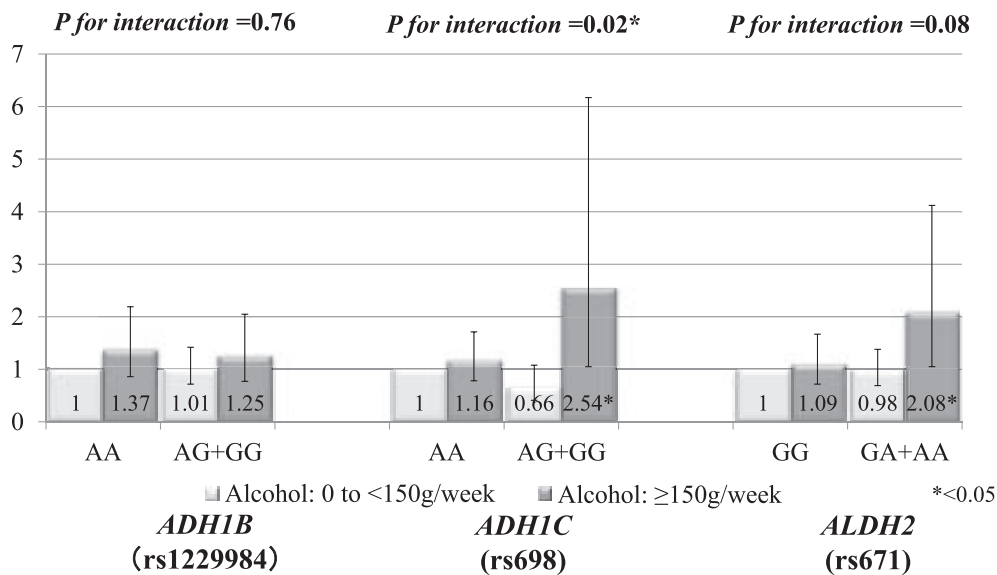


図1 アルコール代謝関連遺伝子多型 (*ADH1B*、*ADH1C*、*ALDH2*) に基づく飲酒量と胃がん罹患リスクとの関連

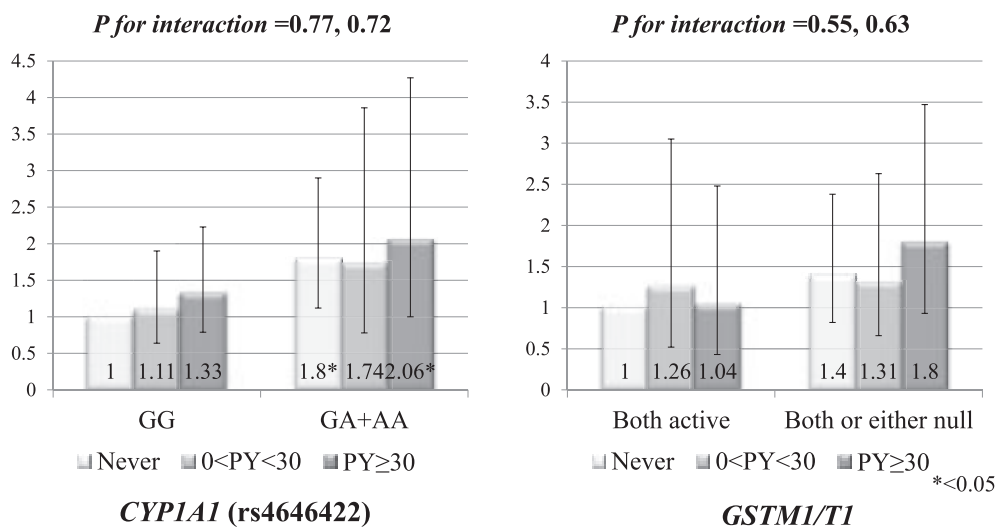


図2 異物代謝関連遺伝子多型 (*CYP1A1*、*GSTM1*、*GSTT1*) に基づく喫煙指数 (PY) と胃がん罹患リスクとの関連

Apocynin の化学予防物質としての可能性

Apocynin has a possibility of chemopreventive drug.

鈴木 周五

名古屋市立大学大学院医学研究科 実験病態病理学 研究員
名古屋市立東部医療センター 病理診断科 部長
Shugo Suzuki (shugo@med.nagoya-cu.ac.jp)



種々のがんにおいて、その発生や進展に酸化ストレスが寄与することが知られています。そこで酸化ストレスを抑える化学予防物質を検討しますが、細胞培養実験と動物実験では結果が異なることがあります。特に一部の抗酸化物質は培養細胞に直接暴露する環境に比べ、動物実験では代謝され想定した効果が得られないことがあります。そこで着目したのが apocynin でした。これは、内因性の活性酸素誘導酵素である NADPH oxidase の複合体形成を阻害することで、この経路を介した活性酸素発生を抑えます。私が最初に apocynin に注目した時期は apocynin を用いた癌関連論文は乏しく、心・血管領域の動物実験において血管内皮細胞の活性酸素抑制が報告されていました。また、apocynin は代謝され二量体を形成することで活性が高くなることから、動物実験ではより効果的に作用するのではと考えていました。加えて、その排泄も腎から尿を介してされることから、排泄される過程で暴露される膀胱に着目し、無機砒素による膀胱発がんに対する apocynin の影響

を検討しました。その結果、活性酸素抑制を認め apocynin の有用性を確認できましたが、その一方で、無機砒素による尿路上皮増殖に対しては部分的な影響に留まり、砒素膀胱発がん要因は活性酸素だけでは説明できないことも解りました¹⁾。その後、我々の教室で開発した transgenic rat for adenocarcinoma of prostate (TRAP) ラットモデルにおいて、前立腺組織内の活性酸素抑制とともに、発がん抑制が認められ、NADPH oxidase による活性酸素産生が前立腺発がんにおいて重要であることが確認できました²⁾。加えて、当教室で膀胱発がんモデルにおいても発がん抑制が証明され³⁾、他の研究室からも、大腸発がん⁴⁾ や皮膚発がん⁵⁾ でも抑制効果が報告されています。難関はまだまだ多数あるものの、いつか apocynin が化学予防物質として使われるようになればと思っています。

参考文献

1. Suzuki S, Arnold LL, Pennington KL, Kakiuchi-Kiyota S and Cohen SM. Effects of co-administration of

- dietary sodium arsenite and an NADPH oxidase inhibitor on the rat bladder epithelium. *Toxicology*. **261**: 41-46. 2009.
2. Suzuki S, Shiraga K, Sato S, Punfa W, Naiki-Ito A, Yamashita Y, Shirai T and Takahashi S. Apocynin, an NADPH oxidase inhibitor, suppresses rat prostate carcinogenesis. *Cancer Sci*. **104**: 1711-1717. 2013.
3. Kato A, Naiki-Ito A, Nakazawa T, Hayashi K, Naitoh I, Miyabe K, Shimizu S, Kondo H, Nishi Y, Yoshida M, Umemura S, Hori Y, Mori T, Tsutsumi M, Kuno T, Suzuki S, Kato H, Ohara H, Joh T and Takahashi S. Chemopreventive effect of resveratrol and apocynin on pancreatic carcinogenesis via modulation of nuclear phosphorylated GSK3beta and ERK1/2. *Oncotarget*. **6**: 42963-42975. 2015.
4. Komiya M, Fujii G, Miyamoto S, Takahashi M, Ishigamori R, Onuma W, Ishino K, Totsuka Y, Fujimoto K and Mutoh M. Suppressive effects of the NADPH oxidase inhibitor apocynin on intestinal tumorigenesis in obese KK-A (y) and Apc mutant Min mice. *Cancer science*. **106**: 1499-1505. 2015.
5. Byun S, Lee E, Jang YJ, Kim Y and Lee KW. The NADPH oxidase inhibitor apocynin inhibits UVB-induced skin carcinogenesis. *Exp Dermatol*. **25**: 489-491. 2016.

私の健康法 My Health Style

渡辺 民朗

介護老人保健施設 仙台ロイヤルケアセンター 施設長
Minro Watanabe (minro@flute.ocn.ne.jp)



永年に亘り、積極的に運動へ配慮することを考え、週 2~3 回は硬式テニ

スを楽しんでいる。若い相手に負けま

と、必死になってボールを追いかけ
ている。まあ、ダブルスで 6 ゲーム先取の 2 セット程度で充分である。最近、ウォーキングの実施方法についての報告が突出して多いと感じている。一日一万歩は歩き過ぎとか、消費カロリーには意味がないとか、同じスピードで歩いても効果はないとか、朝のウォーキングは危険とか、である。特に興味深いのは青柳幸弘氏の報告である。1 日当たり中強度の活動時間、15 分と 7000 歩のウォーキングの試みは、がん、動脈硬化などの予防に効果

があるとのこと。そして、高血圧症、糖尿病、認知症などそれぞれの病氣予防に適切な歩数速度があり、ウォーキングは万能薬の役割ありとのコメントがあるには驚く。

睡眠状態の大切さに気が付き、必要に応じて少量の非ベンゾジアゼピン剤の助けを借りている。就寝前みの服用に頼らず、投与時間の選択も重要であると考える。

食事内容として少量の肉食は摂取するようにし、その際、野菜を箸始めと

して、忘れないように心がけている。サプリメントの利用効果については情報が多く、効果の把握には種々悩まされる。私自身可能な限り試みることにしており、現在は腸内細菌叢が大切と考え、ビフィズス菌関連、そしてラクトフェリンとチョコレートを毎日服用している。

身体検査として、毎年、胸部レ線撮影、胃カメラ、そして2、3年間隔での大腸内視鏡の検査を受ける。一方、高血圧症患者として、3種類の薬を服用

している。自身の血圧値の測定には、その変動が大きいので、困惑している。私自身は1日2回朝夕の測定をし、日内変動にも注意している。適切な測定法について、高血圧症の専門家に尋ねると、意見の異なりがあるのに気が付く。私自身、過激な運動後は翌日にも及んで、血圧は上昇気味であることは確かである。スウェーデンのデータの一つに、一日の全運動量と心への負荷との関係で、男性ではUカーブを示すとのことである。

日本がん予防学会とがん予防のさらなる発展を祈念して —理事長退任の挨拶に代えて— Hoping further developments of the Japanese Association for Cancer Prevention and cancer prevention. — Remarks of retirement from chair of directors



富永祐民

日本がん予防学会理事長

Suketami Tominaga (tominagas@m6.dion.ne.jp)

2年半前に突然電話で小林博前理事長から次期理事長就任の要請がありましたが、数日間、何ができるか、何が必要かを考えた上で承諾しました。さて、「何ができるか、何が必要か」ですが、第1に思いついたのは、がん予防学会の活力と若さを維持するために、定年制を導入すべきだということですが。しかし、私より高齢の評議員が多数おられましたので袋だたきに遭うことを覚悟していましたが、その後のアンケート調査の結果、意外にも65歳

以上の評議員の約8割の先生方が定年制の導入に賛成しておられ、救われた気持ちになりました。今年の12月末で評議員を辞めて1月から功労会員になっていただく評議員の先生方にご理解、ご協力、ならびに長年にわたる日本がん予防学会に対するご貢献に対して心からお礼申し上げます。

もう一つ考えたことは、日本がん予防学会と日本がん疫学・分子疫学研究会の統合でした。平成12年から平成30年までの19回の学会の内16回

(84%)で「がん予防学術大会」としてがん予防学会とがん疫学・分子疫学研究会の学会を共同開催してきました。がん予防学会とがん疫学・分子疫学研究会との組織統合にはメリットとデメリットがあります。私の不徳と努力不足もあり、組織統合の交渉は不調に終わってしまいました。今後も従来通り共同開催することになりました。

定年制導入以外の組織改革としては、理事の選出を3年に1度の評議員による選挙で行うこと、理事、評議員、監事の就任時期(1月1日)と期間(3年)を統一すること、監事の役割を会計監査よりも役員や事務局の業務監査(お目付的)に重点を置くこと、女性の役員を増やすこと、いくつかの委員会(総務・広報、編集、がん予防認定・研修、がん予防)を置き、横の連絡・協働を強化するためのルールを敷きました。次期理事長、理事、監事、評議員、会員の皆様の一層のご活躍を期待し、日本がん予防学会とがん予防のさらなる発展を祈念いたします。

がん予防学術大会 2017

第24回日本がん予防学会 ご案内

日時：2017年6月16日(金)～17日(土)

場所：大阪国際がんセンター

大阪府大阪市中央区大手前3丁目

(大阪府立成人病センターが来年移転して名称を変更します)

テーマ：避けられるがんを防ぐ

会長：松浦 成昭先生(大阪府立成人病センター総長)

第40回日本がん疫学・分子疫学研究会と共同開催

日本がん予防学会 臨時新理事会 会議事録のまとめ

(2016年10月6日 午後7~9時 横浜)

出席者

理事長 富永 祐民

次期理事長 石川 秀樹

次期副理事長 祖父江友孝

次期理事 津金昌一郎 小林 正伸

岡田 太 豊國 伸哉

鈴木 秀和 武藤 倫弘

次期監事 樋野 興夫 (欠席: 中釜 齊)

議題

第1号議案 日本がん予防学会の将来計画の進捗状況報告

初めに富永 祐民理事長から将来計画について、定年制導入、理事選挙導入、女性登用の促進が実施されたことと、日本がん疫学・分子疫学研究会との合併提案の進捗状況に関する説明があった。また、学会内に委員会を設置し、次期理事は、それぞれの委員会の担当理事となることが決まった

第2号議案 石川新理事長からの所信表明

次に石川次期理事長より、学会の活動の中心として、まず2本の柱を据えることを考えていること、学会の一般社団法人化目指したい旨の説明があった。2本の柱は以下の2点である。

①「がんの化学予防研究の推進・支援」——分野の異なる研究者の橋渡し、支援する仕組み、ディスカッションする場の提供。

②「国民へのがん予防啓発」——「がん予防セミナー (仮称)」の実施と、「日本がん予防学会認定がん予防コーディネーター (仮称)」の認定制度の開始。

第3号議案 「がん予防セミナー (仮称)」、 「がん予防認定制度 (仮称)」について

具体的には下記が提案された。

i) 本セミナーと認定制度の実行委員会の設置。

ii) 第1回目のセミナーは、2017年6月に大阪で開催される学術集会期間で実施。

iii) セミナー受講者に対する称号の授与。これらは、来年の学術集会で所信表明として発表される予定であるが、臨床を基盤とする次期理事長の特色が出ているとして次期理事間における理解が得られた。

第4号議案 各新理事による日本がん予防学会の今後についての意見交換 (新評議員増員に関する項目も含む)

臨床研究としては化学予防、また臨床的な成果・目標としては天寿がんがあり、若年者のがん予防も加え、それらを学会のコ

ンセプトとして打ち出せる様に各理事が活動を開始することになった (ロゴ作成など)。また、がん予防啓発と副次的な学会員の増加、若い研究者の育成に関しては、学会を介した共同研究の促進、奨励賞や学会賞などの設立、ニュースレターのネット発信など多くの案が提案され、2本の柱を実現する為の基盤的意見が多く提出された。

以上、約2時間に渡り、特に結論を出すことを求めず、有意義な意見の交換があった。最後に理事長より「2017年1月1日から次期理事の任期の始まりではあるが、現時点よりそれぞれが積極的に活動を開始し、学会として活動を淀みなく継続すること」が求められた。

お悔やみ

本会名誉会員であり、(公財)がん研究会特別顧問 (元がん研究所所長、文化功労者) の菅野晴夫先生が、平成28年10月28日にご逝去されました。生前のご指導に深く感謝し、ここに謹んでお知らせ致します。

〈編集後記〉

The Editor's postscript

ニュースレターの編集担当も回を重ねる毎に執筆を依頼する人を選ぶのに苦勞する。今回は今年の学術大会でご発表していただいた若手の中から、筆者の一存で数名の若い方をお願いをした。がん予防学術大会は疫学学会との合同であったので予防学会の会員ではない方もおられたかも知れないが、皆快く執筆してくれた。有元先生、日高先生、鈴木先生などである。間石先生は岡田太先生からの推薦であった。

がん予防はがんの研究の終局的目標であり、予防できるようになれば、多くの人のがんで苦しまなくて良くなり、がんの治療の費用を大幅に節約できることになる。がん予防学会はそのような期待の基に設立されたが、本学会の会員数が伸び悩んでいることを考えると、ほかのがん関連学会との関係も重要であり、宮園浩平先生には日本

がん学会会長と言う立場で、がん予防についてのコメントをお願いした。がん研究の基礎の学会では最も多くの会員を擁するがん学会会長の立場から、近年がん研究で特筆すべきこととして、「ゲノム医学」をあげ、「がん予防」の研究も「ゲノム情報」を基盤にして発展することに期待すると述べられている。また樋野先生は恩師 Knudson 博士から得た研究への情熱を熱く述べてくれた。また、がん予防学会で大御所の酒井先生もがん予防法開発への思いを吐露してくれた。

本学会創設の時からメンバーである大御所の渡辺民朗先生に遅ればせながら、本ニュースレターのシリーズになっている「私のがん予防」をお願いした。がん予防で推奨される適度な運動を取り上げたくれたのはさすがである。

最後に、今期で退任される富永理事

長から予防学会の今後の方向付けへの提言を戴いて、私の編集担当の「締めくくり」とした。

(細川眞澄男)

Masuo Hosokawa

(kmhoso@pb3.so-net.ne.jp)

発行

Japanese Association for Cancer Prevention
日本がん予防学会

会長

豊國 伸哉 (名古屋大学大学院医学系研究科 教授)

編集委員 (※本号担当者)

石川 秀樹

中江 大

鈴木 秀和

浜島 信之

豊國 伸哉

※細川眞澄男

(50音順)

事務局

札幌市中央区大通西6 北海道医師会館内
TEL:011-241-4550 FAX:011-222-1526
E-mail:master@jacp.info
URL:http://jacp.info/

問い合わせ、入会のご希望などは事務局へ